

目次

【2003～2007年 聖書講筵レジュメ（配付資料等）】

2003年10月 「ほんとうの自由、確かなる希望、そして愛」

2003年10月18日（東京山手教会）

2007年8月 キリスト召団夏季福音特別集会（講筵資料）

（ヒルティ『幸福論Ⅲ』より）

2007年8月24～26日（京都）



キリスト道講演会レジュメ

2003年10月「ほんとうの自由、確かなる希望、そして愛」

2003年10月18日(東京山手教会)

一、自由について

外的制約(不自由……病氣、職業、家族関係、その他の日常生活上の様々の制約。いわゆる運命、環境といったもの)からの解放。

内的制約(思い煩い、心配、不安、恐怖〔死、病、災いに対する〕)からの解放。イザヤ書61・13。

自己自身(罪の自覚と責め)からの解放(罪の赦し、贖罪、あがない)。イザヤ書53章。

十字架に極まりし神の愛、キリストの愛(ロマ5・638)

イエス・キリストは十字架で私の(そして貴方の)全存在を、過去・現在・未来にわたる私自身(貴方自身)を完全にあがなってくださった。根源的に罪無き存在としてくださった。これは神・キリストの側での一方的、絶対的な恵みの御業^{みわざ}。

「それ十字架の言は^{ことば}、滅ぶる者には愚かなれど、救わるる我らには、神の力なり。」(コリント前1・18)

「神の、おのれを愛する者のために備え給いし事は、眼いまだ見ず、耳いまだ聞かず、人の心いまだ思わざりし所なり。」(コリント前2・9)

十字架の恵みの御業を全存在で受け取れば、霊なるキリスト(御霊のキリスト、霊的人格キリスト)が私(貴方)と一つとなってくださる。これも無条件・絶対の恵み。このとき、古き我は十字架において根源的に葬られ、新しき我が生まれていることに気付かされる。

「我、キリストとともに十字架につけられたり。最早われ生くるにあらず、キ

リスト我が内に在りて生くるなり。」(ガラテヤ2・20)

御霊のキリストが内住してくださると、御霊のキリストと共なる生活が始まる。この御方は私にとって何が最善であるかを知っていてくださる。私はこの御方^{みこころ}の御意だけを求めて行けばよい。このようにして、キリストに全托し、信頼して生きると、いつしか様々の囚われから解放されている自分に気付く。現実には様々の外的制約があつても、「有れども無きがごとし」ということになる。

「……我は如何なる状^{さま}に居るとも、足ることを学びたればなり。¹²我は卑賤^{いやしき}に居る道を知り、富に居る道を知る。また飽くことにも、飢うることにも、富む事にも、乏しい事にも、一切の秘訣を得たり。¹³我を強くし給う者によりて、凡ての事をなし得るなり。」(ピリピ4・113)



とのパウロの境地こそ、本当の自由のすがたではなからうか。

二 希望について

「死」で終わらない光輝く御国^{みくに}がある。そこにはキリストがいてくださる。我らはそこに永遠に住まう。すばらしい世界が待っている。備えられている。

三 愛について

キリストは愛そのもの。愛は神、キリストから流れてくる。人間には本当の愛は無い。御霊なるキリストが内住してくださるとき、その御方が私たちを愛の人に変わってくださる。

生涯を神（父と呼んで親しく交わっておられた神）に捧げ、神の御意のみを求め、自己自身には何も求められなかった、そして、我ら罪びとのために身を棄て、十字架にかかり贖罪を果たしてくださったイエス・キリストこそは、本当の自由人であり、愛の権化であった。愛そのものであった。

我らの「自由」も「希望」も「愛」も、すべてこの御方から賜わるのである。



講筵資料

2007年8月 キリスト召団夏季福音特別集会

2007年8月24～26日(京都)

●第一 神の導きのもとに生きる

ヒルティ「わがなんじになさんとするは、驚くべき事なり」

(白水社版、ヒルティ著作集第3巻『幸福論Ⅲ』より)

Ⅰ 「導き」の必然性、「導き」を妨げるものは？

導きには、いつも或る「驚くべきもの」が備わっている。ところが、現代人は、いつも自分の道を歩もうとし、神はこの道に随行し、彼に援助を与えるものでなければならぬと考えている。現代人は、一般に神を、自分のわがままな行動のために、いつも居合わせて助けてくれるものとして求める。人間が神の僕^{しもべ}ではなくて、神が人間の意志とその決意に仕える者である。(98頁)

人が真に自覚をもつてキリストのあとに従う歩みを始めるとき、人は、自分自身で選択を一切やめて、導きと命令のもとに立つのである。

人が容易に自分から手放したがない自立がこのようにして止むとき、それと引換えるように人生における恐怖が止み、内的な安全感が訪れる。これは、ひとたび経験されれば、決して忘れられないものである。その安全感は魂を力と勇気で満たす。

生れつきのままの人間の生活には、どんな人の場合にも、自覚がめざめた瞬間からその消え去る瞬間まで、恐怖がつきまとっている。人間が本来、あらゆる感情のなかで最も恐れているものは、まさに恐怖の感情にほかならない。(99頁)

したがって聖書のなかで、「恐れるな」という言葉ほどしばしば現われる言葉はほかにない。しかしその言葉は、神の導きのうちにいない人にむかつては、一度も告げられていない。(100頁)

恐怖の原因(101頁)

虚栄心、貪欲、憂慮心、自己愛という樹の根の残り、享楽欲(宗教的なものも含む)、行為のどこかにひそんだ不純や不真実。この不純、不真実は、人の眼には全く見えないが、安心感が消え失せ、恐怖が訪れることによって、注意深い人々には神が適確に示し給う。



対処法(102頁)

単純に立ち帰るのがよい。それは自分自身の意志を放棄することによって可能となる。人間は生きる力の抛りどころを、何ものかに求めずにはいられない。それは何？ 若さ？ 自分自身の心？ 自分自身の力？ 人？ 金？ 迷信、運勢、僥倖(思いがけない幸運)などの類？ あるいは神か？ ただ神のみ。

神により頼む者、本当に信ずる者には、すべての憂慮が次第に消え去り、その代りに或る確かな確信が生ずる。それは、一切が善となり、不幸な出来事も、人間の悪や怠りも、また自分自身の過ちも——何ものも真の禍いをもたらしえないという確信である。(105頁)

II 神の導きの不思議さ

導きの著しいしるしは、特に次のような場合に見られる。

書物や、個々の言葉に(時にはまた人にも)、どうしても必要であるようなときに、まさにちょうどよく出会うことがしばしばある。また、大きな危険をまるで目隠しされたようにして通り過ぎ、その際に恐怖を呼び起こしたり、正道からそれたりするような多くの事が、過ぎ去ってしまうまで蔽われていることがある。また、行ってはならない道が、茨でふさがれたように閉ざされていることがある。

また、何かをなすべき時が来ると、以前には欠けていた必要な勇気が得られたり、以前には蔽われていた問題の核心を見いだしたり、どこから来るのか説明できない着想や能力や、時には知識や洞察までも自分のうちに発見したりすることがある。さらにまた、他人が自分では全然意図しないのに、こちらに好意を持って助けを与えさせられ、あるいは敵意を持って助けを与えないようにさせられることがある。そのために、しばしば無関心な他人、あるいは敵対者すらも最大の益と励ましを与えてくれるのである。(108～109頁)

こうして、人は自分の使命を果すのに、時を早まることも、また時を逸することもなくなる。さらに、万事について待つことができるようになる。これは人生の大きな秘訣である。また、いつでも物事が一つ一つ順を追って来ることを知って、まず一つの事を着実にふまえる余裕を得られることも、目立った経験である。

また、なすべき事も、いつも正しい時に思いつくようになる。それはしばしば、まるで第三者が、忘れやすい事がらを適当な時に注意してくれでもするかのように、極めて明瞭な仕方で行われる。(110頁)

また、しばしば人が正しい時に自分のもとに遣わされて、なされなければならないこと、しかも自分からそれをする勇氣と決心を決して起こし得ないようなことを、要求したり命



令したりしてくれることもある。(111頁)

また、こういった経験がたびたび与えられることによってのみ、どんな人間にも——厭わしい人間やだらしない人間や邪悪な人間にもさえ——忍耐をもつて対することができ。なぜなら、そういう人たちもまた、人を善に向けてくれる神の器であり、しかもしばしば最も有効な働きをさえてくれるからである。

(註：神は、そのような人々をも用い給うに相違ない。この世の悪も、神によって、善のために役立たせられるに違いない。もっぱら良い器だけが神の御用に立てられるとは眼らない。また良い器だけでは、多分、数が少なすぎるであろう。敵は必ずしも取り除かれない。ただその力は破られる。しかしまた、神は敵の心を和らげせ給うことがしばしばある。)

(112頁)

導きを願うならば、それはおそらく直ちに十分な仕事を課してくれるであろう。(114頁)

人生をよく生き抜くために最も容易な道は、ゆたかな導きに伴われて多く働くことである。(いわゆる「神秘主義」的生活に入ろうとすることへの忠告として)(116頁)

「驚くべき導き」の、神の側での目的は、われわれを普通の直接的な意味で幸福にすることではなくて、恐れのない、すべての善き行為によるこんで赴く人、一言でいえば、英雄的な人になることにある。これが同時に最善の幸福であることは、第二義的な問題である。

「導き」を信ずること、導きに対する感受性を鋭くすること。(120頁)

いつも導きは、個々の場合においても、そのときどきに存在する信仰の量によって制約される。「あなたの信仰どおり、あなたの身になるように」、つまり欲するところに従って、大きな事も小さな事もなされる。

神の導きのもとに置かれた人間にあつては、不信仰、ないしは人や金や名誉などの、神以外のものに依り頼むことが、その犯しうる最大の誤ちである。(121頁、註4)

(導きのもとにある人生の)最高の段階は、自分の運命を単につぶやかず、またはもっぱら受身の忍耐で受け取るだけでなくて、これが正しい事だという喜ばしい確信をもつて迎えられる境地である。ここに到り得た人は、キリストとともに言うことができる。「この世には不安が満ちている、しかし私はすでに世に勝った」と。(122頁)



●第二 神の民

ヒルティ「現代の聖徒」(『幸福論Ⅲ』より)

「神の国」は、明らかにもっぱら次のような人間から成っている。すなわち、自分の自由な意志と決意をもつて、神にのみ仕えること、そして神を心を尽くして愛すること、に踏み切った人々である。この人々は必ずしも外形的な団体のなかに統合されたり、個人的に知り合ったりすることを必要としない。しかしそれにもかかわらず、またその散在にもかかわらず、彼らは神がそのゆえにこの世に「住み給う」ことのできる一つの人類を形づくる。全く異なつた種類の人々のもとには、神はその聖さのゆえに、住み給うことができない。たとえその存在が全然知られず、外見的にはあまり活動しなくても、彼らは国家や教会を現実を支える。他の人々においては、正反対の場合のほうがずっと多くさえある。彼らはまた、あらゆる時代に存在した。すでに旧約の時代にも、また新約の時代にも、或る時は単独で、或る時は比較的多数で、そして最も悪い時代にも、人の眼の見えるところより数多く存在した。今日でもやはり同様である。この人々を知ることが、異常な特権であるが、人に知られることは、この人々にとって幸福ではない。

しかしこの人々は、どんな時代になつても、決して目に見える外形を持ち、自分の仲間だけに眼られた団体を作らないであろう。むしろ彼らは、主の言葉に従えば、それぞれの国家や教会の人々全体のなかに混ぜられた「パン種」として、それを支えて、実りをもたらす要素であり続けるであろう。(207～209頁)

神の国が戦う国であるかぎり、そのような聖徒となるためには、特別な「召し」がなければならぬ。

すべての人は真理に従つて永遠の生命に到るよう召されている。しかし真理を深く認識することは、少なくともこの地上では、すべての人には許されない。それがなぜであるのか、われわれとしては明らかにしない。

聖徒となるために何が必要か。

「開かれた眼と耳」

次に愛(神を愛すること)。この愛さえあれば、その他一切の事はその結果として、ひとりでやって来る。このような愛の霊は、人間に、ふつうでは見えないすべてのものを示すからである。(211頁)

神がともにい給うことこそ、一切の宗教ならびに一切の幸福の唯一の要諦なのである。

すべての新しく生まれてきた子供は、いつも神の新しい創造物であつて、この生命が或る価値を持つためには、このなかに遅かれ早かれ神の霊と神の愛が独立の根をおろさなければならぬ。(213頁)



聖徒たることは、神への愛の程度が、人間の内の他のすべての感情を凌駕するほどの高さに到った状態にほかならない。そしてまた神への愛は、この生命^{いのち}を超えて無限に高められる可能性を持つ。現代の聖徒の真髄はこの愛であつて、過去の諸時代の形式に束縛されず、またおよそ形式というものに、可能なかぎり束縛されない。しかしそれは形式に対する反感と反抗ではなくて、これらの形式が各時代それぞれの神への愛の表現として尊敬すべきものであり、或る程度までいつも存続するであろうという認識を伴っている。来るべき世になつてはじめて神殿はなくなるであろう(ヨハネ黙示録21・22)。(214頁)

教会が現在必要とするもの(国家とても同様である)は、内に神の愛の輝いている人間、地の塩である人々であり、その数がさらに増すことである。この塩がなければ、すべての社会改革も祝福と力を伴わない死んだわざである。

愛による一致。

この愛は人権平等の根源であり、現代における真の人間性の基礎である。そして愛を持たない、利己主義、派閥、享楽欲の精神に対する唯一の有効な対抗力である。神がそのような精神に抗して絶えず戦い給う道は、常に新しい人々を起してそれを繰り返し克服させることにある。(216頁)

人の言葉は、物質の世界と全然離れたものを表現し得ない。多くの気高い魂の人々を今日の教会から敬遠させるのも、そのためである。しかも、神に対する愛をもっと多く持つていれば、その人々は教会を尊敬するであろう。神の眼には現代の教会がわれわれの眼に映るよりもはるかに不完全に見えるに相違ないのに、神御自身はそれを尊び給うからである。なぜならそれらすべての教会のなかにはいぜんとして祝福が置かれている。もし教会が全然死んで祝福を失つてしまっているならば、ひとりでに滅び去っていることであろう。(217頁)

「私は、価いしない神の思恵によつて、神を次第にすべてのものにまさつて愛し、神にとごとく信頼し、神とならんでほかの何かを大切にしたり、あるいは神の意志に背いて行動することをもはや全然考えない立場に導かれた。これが私に平安と確信と喜びを与え、すべての人に対して親愛の念を抱かせ、現在よりも無限にすぐれた未来への希望を確実にする。神がわれわれから求め給うものは、われわれとともにい給うること、神の霊によつて活かし育てうるような、神をしたう心を見いだされること、これ以外の何物でもない。われわれは自分の内にある自由意志をことごとくそのために捧げなければならない。それからのちの一切は、神がわれわれに対してなし給うところであつて、そこには次々に与え



られる賜物が満ち溢れる。」(218頁)

神の霊には、完成の妨げとなる一切のものからどんな人をも解き放つ力があり、そしていつでもそれをする備えがある。この力を受けるとき、人はちょうど長い捕囚から解放されたように息づき、すべての人間に対して全く新しい関係に入る。いな人ばかりでなくすべての被造物、すなわち生命のある世界と生命のない世界全体に対して新しい関係を持ち、この世界との調和を再び回復する。この実感をまだ持たない人は、いずれにしてもまだ聖徒たる状態には到達していない。(219～220頁)

聖徒たちの共通の特徴は、次のようなものである。

1. 謙遜。これは自己卑下のことではない。自己卑下は、ほとんど常に隠れた虚栄心の徴候であり、それに対する反作用の現われである。反対に、謙遜は、人間の力の卑小なものと神の力の偉大なことに対する深い、正しい認識である。そしてこれは、心の喜ばしさと極めてよく結びつきうる。しかし一切の人間崇拜、ことに自己自身の絶対化を不可能にする。(222頁)

2. いつも変ることのない慈愛。これは正しい者の上にも正しくない者の上にも太陽を輝かせ、人間の内にある僅かで微力な美点をも認めてこれを励まし給う神の愛の面影である。これは、おそらく聖徒の最も重要な性格である。

キリスト信徒がすべてキリスト御自身と同様に、地上に神の慈愛を体現する人間であったならば、世界はとつくにキリスト教によつて征服されていたことであろう。(225～226頁)

3. 「怒りっぽい聖徒」というものも、われわれとしては決して信じられない。怒りは恐怖から生ずるからである。聖徒たることの最も確実なるしは、むしろ完全に恐怖のないことである。なぜならこれは、神に対する完全な信頼の結果であり、そしてまたこの信頼も、人が神と絶えず直接に結びついていることによつてはじめて成り立ちうるからである。このとき人は、自分に近づくどんな患難もどんな危険も、すべて自分の益とならずにはいないことを確信する。(227頁)

4. 以上の最後として仕事。無為に暮らす聖徒は存在しない。

外に現われたキリストの性格で、この上なく気持よく感じられるのは、一方で完全な落ち着きを保っておられることである。あくせくしたり、あわただしく突進したりするところが全くなく、現代の布教者たちのいわゆる「魂の飢え」がほとんど見られない。

もつぱら瞑想に耽る生活に対しての忠告。絶えず戦わなければならない相手は、もつぱ



ら安逸と「瞑想」を欲する、善への怠惰である。力を与え、実りをもたらす唯一の瞑想は、経験によって容易に知られるとおり、仕事のさなかに、ないしはそのあとで自然にやって来るものである。作為の瞑想は、香気のない造花であり、何の価値もない。

仕事、および神のみそばに自己を固く保って置くこと、そして一切の単なる享樂を斥け、ないしは避けること、これが、われわれの上に日の光と生命の光が照っているかぎり、日々の務めである。許された休息は、睡眠によって与えられる。さらにまた、日曜日によって与えられる。この日にのみ、仕事を伴わないもつぱらの瞑想は害を生まず、それに反してすべての不要、不急の仕事は有害である。一切の肉體的な媒介なしに神の直接の導きと教えを受けて歩む、このような人生の喜ばしさにまさるものは何一つない。(228～231頁)

●第三「われら何をなすべきか」(ヒルティ「幸福論Ⅲ」より)

福音は、人間が自分自身を知っている以上によく人間を知っており、新参者に対して最初の瞬間には行為や大きな生活の変化などを全然求めず、もつぱら善への自由な決意を要求する。その上で持続するよき意志が、そして最後に信仰が求められる。この段階ではじめてキリスト教は上からの力と促しとを人に約束する。そしてこの力と促しだけが、神の前に認められるようなよきわざを生み出させる。

それに反して、自分の力と自分の発意によるわざは、生れつきの自我性のゆえに、実にしばしば歴史のなかで、神がなし給わんとした最善の事を人のほうから部分的に破壊した。というのは、最も偉大でかつ最も明白な神のわざでさえ、ひとりでに維持されるのではなくて、各世代の、またそのなかの一人一人の人間の絶えず新しい自由な意志と新しい従順な献身とを必要とするからである。またこのような精神から出る事でなければ、神のわざの維持のためには無価値である。(249～250頁)

人生には、信仰と行為がまさに二つとも必要である。ところで後者(行為)に必要なのは、使命の付託である。すみずみにまで及ぶ、絶え間ない命令とさえ言うてよいかもしれない。

キリストの弟子であり、その御国の積極的な民であるにふさわしい心構えを教えられた山上の垂訓のすぐあとに、その心構えを実生活に生かすための一種の一般的规定がマタイ福音書第10章で現われる。これは全く軍隊の一般的規律と同性質のものである。

註…一般にキリスト教は、その心構えの極めて柔和であるにもかかわらず、それが実行に移されると、疑いなくその本質のなかに或る武人的性格を現わす。そのようなキリスト教の本質を最初に把握したのは、祭司でなくて軍人であった(マタイ8・8、27・54)こと、また神御自身によって召された最初の新参者がやはり軍人であった(使徒行伝10・3～6)ことは決して不思議ではない。

その規律は慰めの言葉で始まり、慰めの言葉で終わる。行為を命じられた人々は、自分



自身の意志からでないのと同様に、また自分自身の負担にもよらずに世のなかに出て行く。彼らの上には主の御名と命令があり、また主の報酬が彼らに与えられないことはない。彼らは自分自身の力にも頼らず、まさに人間の魂が何よりも求めるもの、すなわちもろもろの霊を制する権威を受ける。いな、自然の力が彼らの行動を妨げることがあれば、それをさえ制しうるであろう。そして最後にはなおその上に、友人や弟子たちを見いだし、この人々が彼らをその心と家のなかに迎え入れてくれるという約束が与えられる。そしてその人々にもその事に対して大きな報いが約束される。

したがって、この世での人間の真実な要求が、魂の要求をも含めて、すべてこの務めのなかで満たされる。それは世とその支配者たちに仕える務めの場合に較べてよりよく、より確実である。ところで、この事をあらかじめ承知されたならば、耳と心を聞いて、次の指示を聞かれるがよい。(253頁)

まず自分の属する国の同胞のもとに赴くがよい。神は「秩序の神」であり、人が一つの園、一つの民族に属することは、神の定め給うた秩序である。それをことごとく無視しようとする国際的、人道主義的、社会主義的な営みは、あらゆる真実の成功の唯一の源である神の祝福を決して伴わない。

神の国を奨めるがよい。癒し、潔め、人の心を目覚まし、一切の悪に対して真向うから公然と反対するがよい。これが諸君の毎日の仕事であり、務めである。諸君はそれをなすべく召されている。

自分の活動のなかに利益を求めず、これを付随的な問題としてすておき、必要なもので満足するがよい。

誠実さと矛盾しないかぎり賢くあれ。そして争いや危険を勝手に求めぬがよい。しかし反対者が現われたとき、しかもそれがしばしば自分の近しい者であつても、あまり驚かず、またどうしてそれに対抗するかを思いわずらつてはならない。キリスト教は最後まで憎まれざるをえない。諸君の主が受けられた以上の待遇を諸君は要求できない。諸君は耐え忍ばなければならない。戦いは決して長続きしないだろう。

それゆえ、恐れてはならない。しかし、神を恐れよ。

絶え間のない平和と安息を決して当てにしてはならない。もし諸君がこの世で恵まれた生活を見いだすならば(たしかにこの世の霊は、もし諸君がいまでもなお立ち戻つて、この霊を自分の主と認めようとすれば、それを簡単に約束してくれるであろう)、そのために真の生命を失うことは確実である。しかしもし諸君が眼に見えないものを信じ、またこの指示を信じて、多くの眼に見えるものを勇ましく放棄するならば、そして人間がその生涯でなしうる最大の踏切りを日々また機会あるごとに冷静な決意をもって新しくするならば、そのために必要な力を受けるばかりでなくて、諸君が放棄したすべてのものを——それがおよそ価



値あるものであるかぎり——百倍にして返していただだけ、しかもその上に永遠の生命を得るであろう。これによって、またこれによってのみ、諸君の人生は、およそほんとうの内容と永続的な価値を持ったのである。

したがって右の事が、簡單明瞭に表明された、正しい人生の条件である。

われわれにはそれ以外の形で考えることはできない。

われわれは、右のような条件を受け入れ得るか、あるいは受け入れ得ないかのどちらかである。人間の生き方は意志の自由に基づき、そして神は自由な人間と喜んで仕える僕しもべを求め給うからである。(254～256頁)

しかし、最初はただおのきおびえながらこの正しい、狭い道に踏み入る人々を、この指示を与え給うた主は、同情と寛容をもつて顧み給う。そして主はこの人々に、折にかなって語られた無数のよき言葉によって、またすべての可能な緩和の処置によって、またその道を歩んで決して挫折せず、その生涯の終りに悲觀論者にもならなかつた無数の人々の実例によって、勇氣を与え給う。

疑い深い人には、繁榮の生活にはやはり他の道もあるのではないかと、まま疑問に思われるかもしれないが、しかし最も確實で最も容易な道、そして過去と未来にわたって最善の仲間のいる道は、いずれにしてもここに述べたものである。(257頁)

最善の事は、自分がほんとうに何かを成し遂げられる分野を見いだせるように、自分に特有の使命を与えていただくことである。

朝もしくは夜半に目覚めるとき、最初に神のことを思うならば、その人生は勝利である。また神のことを夢に見はじめると、それは勝利以上のものである。(258～260頁)

現代で神を信ずるのは、神を愛し、また神の愛を実感する人だけである。

もし自分が神の靈そのものによって促されて、誠実に「主よ、私はあなたを何ものにもまさって愛します」と言える日が訪れるならば、自分の人生の目的は達せられたのであり、どんな永遠もこれよりまさったものを与えることはできないであろう。この時に「神がともにい給うこと」が実現する。それ以前には自分のキリスト教も、自分の幸福の永続性も、まだ大したものではない。

愛の偉大さ。誰も単なる記憶力だけに頼って、自分がしなければならないすべての事を覚えていくわけにはゆかず、ましてどんな瞬間にもそれに応ずる適切な意志の力を見いだすことはできない。しかし愛は、忘れられえないという長所をそれ自体に備えており、人をどんな時にも、愛に従った、かつ人になくってはならないものに向って促す。したがって、すべての環境に適合し、あらゆる人の要求である個性を完全に活かし、そして人を確実に



幸福へ導く極めて簡潔な人生訓を望む人があれば、「神を心を尽くして愛せよ。そのあとは、自分の欲する事をなすがよい」と答えることができる。(261頁)

教会の諸制度について。キリスト教会の諸制度、その礼拝、その管理、国家との関係などは、さし当ってそのままにして置くがよい。その代りに自分の持ち場で、強力な信仰が新しくまた多くの人々のなかに生まれるように配慮するがよい。そうすれば、あとの事はひとりでやって来る。キリストも、当時の礼拝上の諸制度に対して、それが絶対に非道德的でないかぎり、ほとんど干渉されなかった。そこに支配していた単なる形式主義を決して見誤まられるわけはなかったにもかかわらず、キリストはむしろそれを自ら守られた。人間というものは、やはりしばしばこのような外面的な事物に心からの愛着を寄せる。そして信仰のかなりの部分が失われることなしには、そのような事物を取り除いたり、ないしは根本的に変革したりできない。したがってこれについては、「それを破るな、その中にまだ祝福があるから」と言われる。また歴史について見ても、外面的な改革から着手した人々、ないしはそれに極めて大きな価値を置いた人々は、すべて野心家であって、のちにその信仰の破綻を来したことが容易に認められる。このような性質の改革には祝福がないからである。(265～266頁)

自己の生活の改革について。自分自身の生活においては、何らかの形で神に対する心の結びつきを妨げているすべての事を改革するがよい。

よい行為を妨げる二つの最も普通で強力な邪魔物は、虚栄心と貪欲である。この両者は、共同の源泉から流れ出ていて、もっぱら自分自身のことだけしか考えない習慣を持っている点で、内面的に共通している。これは、神の国の民の間にさえもやはり見られる。ここでは、ことに精神的な自己追求があつて、いつでももっぱら自分の訓徳や励ましや慰めばかりを求め、この自分一人の救い以外の関心事をそもそも何一つ持たない。

貪欲の一例…売り手の気持などそちのけで、何かを実に安く買ったといつて喜んだり、節約しなかったほうがよかったと思われるものを節約したがってみたりする。

その克服策…いっそう多くを得るための最善の手段は喜んで与えることであるという経験が、最も確実な効力を持つ。(267頁)

そのほんとうの性格と志向からすれば、キリスト教は、日常の瑣事とその苦勞を全く超えた最も宏壮な思想を伴う雄大な人生観である。しかもこの日常の苦勞をやはり取り上げて、人にそれを一挙に超克させる力を与えうるのである。

もしキリスト教が常にこのようなものであつたなら、別の言葉で言えば、その主の御霊みたまにいつも満たされたキリスト教であつたならば、すでにとうの昔に、雄大な考えを持つす



べての人々を自分の陣営にひき入れることができたであろう。(268頁)

われわれは、単純な福音の透明な光と自分の力でない聖霊の力の助けとによって、心を蝕まれずにこの現代生活を負い切ることができると信ずる。それには「たえず祈れ」の心構えが必要。ふつうの教会的信仰ではおそらくそこまでめったに到達しきれない。単なる「昔ながらの」信仰では不十分であって、初代の信徒たちと同様に、各時代においてほんとうに新鮮で自然なものでなければならぬ。明らか神の前でより貴ばれるものは、新鮮さと真実さであって、その表現形式や、あるいは一定の教会的な交わりに所属していることではない。そしてわれわれ自身に対しては、自らの主張する事柄と完璧に一致した、生きた信仰だけが、これによって得ようと欲する人生の幸福を提供してくれる。(269頁)

大きな邪魔物…善い行為を妨げる大きな邪魔物は、偶像である。

宗教的な偶像のほかにも、身分、財産、知識の高ぶり、学問、芸術(ことに音楽)、また時には子供、両親、夫や妻、宗教家、支配的な人物ないしは歴史上ならびに現代の偉人。これらすべての人や事物は、ほんの僅かでさえも神とキリストと同列に置かれてはならない。すべての偶像のなかで最も大きな、最も危険な偶像は自我である。

神をひたすらに愛することこそ、そもそも万事の根幹である。なぜなら、どんな人も偶像か神かのどちらかを愛している。しかし大多数の人々は、その両者をならべて愛している。そこから多くの不和や闘争が生じ、すべての党派心が生まれて、キリスト信者のなかにも根を張るのである。(272～273頁)

人々に対する、また動物や植物さえも含めておよそわれわれを取り囲んでいる世界全体に対する正しい関係は、ただ絶えざる善い行為によってのみ生まれる。そうでなければ、他人をいつもあるいは高く、あるいは低く評価しすぎ、いずれにしても自分の幸福があまりにも多く他人の影響に左右される結果となるであろう。

しかし、絶えざる善い行為によって神とのむすびつきが堅固になったときにはじめて、人はおのずから内なる眼を開かれ、他人の心の中を見透し、そして神に敵対する、したがって有害な一切のものに対して、全く確実な警告を読み取ることができる。(273頁)

人間関係において心得るべきこと… 少なからぬ人々、ことに婦人たちは、いつも誰かに対して「何ものかであろう」とすることによって、自分の生活を失い、多くの骨折りと労苦にもかかわらず、自分と他人を不幸に陥れる。この人々は、相手が、自分のこのように真心をこめた努力を、ひとりよがりとして不愉快に感ずることなど、全然理解できない。もし自分が現に何ものかであるならば、その存在の意義は何一つ努力をしなくても、全く



ひとりで人の心に刻まれる。そして、もしほかにもっとすぐれた性質を欠いている場合でも、他人に対して少なくとも気持のよい存在であるという天分を持っているということ、それだけです。すでに極めて貴重な性質である。(276頁)

神の意志にしたがった行為の最も明白な結果は、いつでもそこから生ずる喜ばしきである。それは、しばしば単なる神経の興奮にすぎない騒々しい陽気さ——これはあとに哀愁を伴う——ではなくて、静かで明朗な快活さと生気に溢れた喜ばしきであり、しかもそれが例外としてではなく、つねの状態として存在する。まさにそれこそ人の心が本来最も強く憧れ、もし一度それを実感し、のちにまた失ってしまった場合には、その喪失の痛手を最も烈しく感ずる境地である。(277頁)

喜ばしさと慈愛とは、キリスト信徒の義務でもある。根底は同情である。

どんな人も生き物をも不必要に苦しめまいと堅く決意することが大切である。

それゆえ、自分がそのような真のキリスト教の体現者となるようにひたすら心がけるがよい。その他のすべてについてはあまり心をわずらわさぬがよい。恐れるな、ただ信ぜよ。いつも善意を持って働け。勇敢に生き、喜ばしき希望をもって死ぬこと——これこそ計算に狂いのない唯一の人生設計である。(280～281頁)

それに到る道… 神に向って決断せよ。自分に対して、力と個性を考慮の上で個人的に向けられた神の命令に柔順であれ。そうすれば、すべてのものの、またいっそう大きな力もひとりだけでやって来る。神の霊は、健康な人だけでなく、弱い人、病人をも強くする。

どの道を選ぶかは、自分の責任である。神に自分の意志を捧げようとさえすればよい。「神がひとたび人の意志を所有されれば、そのあとのすべての事は神みずから人の内に行ない給うて、人を完全へ導き給う。」(ジェノアのカタリーナ)(281頁)

どんな仕事も、神ぬきでは困難である。またどんな仕事も、神とともにあれば可能である。(282頁)

キリスト教はいつもあるがままの人間を取り上げ、このような人間から不可能な事を要求はしない。したがって、報いは存在する。すでにこの地上で、善人に対して、また、外形的な報いをも伴う。しかも、福音書において、それがどのようなものであるかが極めて明瞭に告げられている。さらにこの内容を、一言でもっと明瞭に、地上における善の報いは祝福であり、悪の報いは祝福の欠如であると言つてよい。(284頁)



最大の事は、祝福を受けることではなくて、祝福となることである。これが人間としての
の真実の偉大さである。（289頁）

「わが神よ、なんじに感謝しまつる、

なんじの御旨によりこび従いて生きんとする心を

わが内に与え給いしことを。

わが心を続け治め給え、

朝より夕にいたるまでわれとともにいまし給え。

わがなすところのすべてに、なんじの知恵と御業を加え給え。」

（ヒルティ）

